

2020年2月23日

福音書からのメッセージ

イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」
(マタイによる福音書17章7節)

ペトロとヨハネとヤコブという三人の弟子を連れて高い山に登られたイエス様。その姿は彼ら弟子たちの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなったとあります。そしてモーセとエリヤが現れ、イエス様と語り合っていたそうです。まさに神々しいと表現してよいのかもしれません。そのような姿を見ることができた彼ら三人は、とても喜んだことでしょう。

そこでペトロは山の上で、イエス様にこう言いました。仮小屋を建てましょうと。仮小屋を三つ立てて、モーセ、エリヤ、そしてイエス様をそのまま山の上にとどめておこうと思ったのでしょうか。そして自分たちも、いつまでもその栄光の中にいたいと思ったのでしょうか。

実は今日のこの箇所を読むときに、忘れてはいけないことがあります。それは今日読まれた箇所の直前であるマタイ16章の21節以降に、イエス様が死と復活の予告をされたという記述があるということです。イエス様は弟子たちに対して、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになると打ち明けます。それを聞いたペトロは、こう言ってイエス様をいさめます。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」。

今日の物語はその直後の出来事です。こうしてみると、仮小屋を建てようといったペトロの気持ちが何となくわかるような気がします。ペトロは、イエス様に十字架の道に戻って欲しくなかったのではない



でしょうか。イエス様が死に向かうのが、耐えられなかったのでしょうか。しかしイエス様は山の上にとどまらずに、山を下りられました。山を下りる、それはこの直前に予告された、十字架への道を歩

むということです。神さまのみ心のままに、傷つき、倒れ、苦しむ人々の間を進むということです。

イエス様は山の下にいる人々に、目を向けられたのです。山のふもとで、自分はダメだ、生きるのもしんどい、もう歩けないとうなだれている一人一人のところに下りて行って、一緒に歩んでくださるのです。

神さまから見たら、本当にどうしようもないわたしたちかもしれない。でも、だからこそ、イエス様は山を下りられ、わたしたちと共にいるという選択をなさったのです。なによりそれが、わたしたちを愛しておられる神さまのみ心なのです。

なぜイエス様は十字架につけられなければならなかったのか。そしてイエス様が復活なさった意味は何なのだろうか。それがわたしたちにとって、どういうことなのか。今週の水曜から始まる大齋の期間に、思い巡らしていくことができればと思います。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>